

<p>10日 (日) ヨシュア 20章</p>	<p>「逃れの町を定め…過って人を殺した者がそこに逃げ込めるようにしなさい。そこは、血の復讐をする者からの逃れの場所になる」(2-3節)。「過失」か「故意」か。罪を犯す人の心を正しく裁かれるのは神のみ。パウロは「自分で復讐せず、神の怒りに任せよ」(ローマ 12:18)と言った。わたしの心の深みを真に探りつつ、正して下さる神の慈しみを覚えたい。</p>
<p>11日 (月) ヨシュア 21章</p>	<p>「祭司アロンの子孫に与えられたのは、殺害者の逃れの町であるヘブロンとその牧草地のほか…合計十三であった」(13、19節)。レビ人(礼拝奉仕者)たちに各部族から土地が提供された際、六つの「逃れの町」はすべてレビ人の町とされた。「逃れの町」に逃げて来た殺害者たちを正しく受け入れる大切な責任が、神の礼拝奉仕者たちに託されたのだった。</p>
<p>12日 (火) ヨシュア記 22章</p>	<p>「ルベンとガドの人々はこの祭壇を、『わたしたちの間では主が神であることの証人』と名付けた」(34節)。この22章のエピソードは、ヨルダン川の東側と西側に住む部族間に微妙な緊張関係があったことを物語っている。距離の遠さが不信を生み、時として敵意となる。そのような私たちの間に立ち、共に礼拝する者として立ててくださる主の慈しみを覚えたい。</p>
<p>13日 (水) ヨシュア記 23章</p>	<p>「あなたたちの神、主があなたたちに約束されたすべての良いことは、何一つたがうことはなかった。何一つたがうことなく、すべてあなたたちに実現した」(14節)。ヨシュアの生涯は戦いの日々であった。荒れ野を導くモーセの旅とは異なる困難があったことだろう。しかし、ヨシュアの目は神の良き約束が「何一つたがうことなく実現した」ことを確かに見たのだった。</p>

<p>14日 (木)</p> <p>ヨシュア記 24章</p>	<p>「見よ、この石がわたしたちに対して証拠となる。この石は、わたしたちに語られた主の仰せをことごとく聞いているからである」(27節)。ヨシュアは「大きな石」を見せて語った。「この石は主の言葉をことごとく聞いている」と。主イエスが十字架に向かう道で「石が叫び出す」と語られたことを思う。私たちは神ご自身が語られる言葉を誤魔化すことはできないのだ。</p>
<p>15日 (金)</p> <p>士師記 1章</p>	<p>「主がユダと共におられたので、ユダは山地を獲得した。だが、平野の住民は鉄の戦車を持っていたので、これを追いつくことはできなかった」(19節)。士師記は、イスラエルの人々がカナンに住民たちとどう戦い、共存するかの葛藤を歩んだ姿を記す。「武力」の戦いには「上」があり限界がある。私たちが共に生かす「命の力」を主イエスからいただきたい。</p>
<p>16日 (土)</p> <p>士師記 2章</p>	<p>「その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った」(10節)。荒れ野の旅を知る世代が絶えた時、人びとは信仰の危機を迎えた。信仰において「主を知る」とは単に知識として神を知ることではない。信仰は神の恵みの御業を体験すること。今日、その恵みを知る者とされたい</p>
<p>17日 (日)</p> <p>士師記 3章</p>	<p>「国は…平穏であった」(11節)。ヨシュアの死後、イスラエルの人たちは、他の神々を礼拝し、そのたびごとに神の怒りを知ることになる。主に立ち帰ると、「主は彼らのために一人の救助者を立てられた」(15節)。人々が主の前に一つになろうとするとき、国は平穏な時が備えられていた。主によって一つとなる群れの姿をみる。</p>